

〈論文〉

中国語訳『奥の細道』の比較研究 (1)

田 中 幹 子・鄭 寅 瓏

はじめに

『奥の細道』は現代に読み継がれている古典である。芭蕉は、西行・宗祇らに憧れ、自ら漂泊詩人として生きようとし、ついに不易流行の思想を自分のものとした。その成果が、和歌のみならず漢詩文を踏まえた簡潔で磨きあげた文章表現で記された『奥の細道』である。本稿では、芭蕉の魅力が中国でどのように訳されているかを研究するものである。現状では全訳として見られる中国訳のすべてである5本を集めた。本稿で先行研究を基に原文の解釈をしながら、この5本の訳の解釈を比較検討し、原文世界を中国訳でどのように解釈されているかを分析したい。猶、中国訳の収集、及び中国訳の日本語訳は札幌大学非常勤講師鄭寅瓏氏が担当した。

一

まず、本稿で比較する5本の中国訳『奥の細道』の訳者を紹介する。

1・張香山訳 (1987年)

張香山氏は、1934年東京高等師範に学ぶ。37年に中国に戻り、以後中国アジア・アフリカ団結委員会副主任、中日友好協会副会長、外交部顧問、日中友好21世紀委員会中国側委員、中国国際交流協会副会長などを歴任し、88年日中友好21世紀委員会中国側首席委員となる。筑波大学名誉博士。1982年、『奥の細道』を訳し始めた。張氏は「周作人の『奥の細道』の俳句の翻訳について「十七音の詩であるが、中に含まれる意味は言葉を超えているので、訳しがたい」と評したので躊躇したが、このような名著の中国語訳が未だにないことに残念だと思い、勇気を持って最初の訳をした」と述べる^(注1)。北京大学東方文学学科で指導した時に、1986年日光、仙台、松島を三日間回り、帰国した後二ヶ月後、全部訳した。それを『日本文学』季刊1987年第二期で発表した。

2・陳岩訳（1995年）

陳岩氏は、1967年大連外国語大学日本語学科を卒業し、1989年中国文化書院の中外比較文化の修士課程を修了。1981年以来、四回、合計五年間来日した。中国の国内外で教材、訳本や著作を三十余种余出版し、論文七十余本を発表し、現在大連外国語大学の教授であり、日本の城西国際大学の客員教授。前書きに、入江幸太郎、中西進、松村博司先生の下で二年間日本古典文学を勉強し、特に入江先生の指導の下、その時で『奥の細道』を訳したとある。帰国後、陳岩氏は1995年1月から1997年12月までに『日本知識』（大連外国語学院）で全部の訳を発表した。そして、2011年に修正を加えて出版したのである。

3・鄭民欽訳（2002年）

鄭民欽氏は北方工業大学人文学院教授であり、翻訳家。1969年北京外国語大学を卒業し、1973年から翻訳を始めた。代表作には『日本俳句史』『日本民族詩歌史』『和歌美学』などがある。訳本は『源氏物語』『東京人』『孔子』などがある。

4・陳徳文訳（2008年）

陳徳文氏は1960年、北京大学東方語学部日本語学科に入学、1965年卒業。南京大学日本語教授だった。1985年から1986年まで、早稲田大学に在籍。紅野敏郎教授の指導のもとで島崎藤村を研究した。1989年と1994年に2度と日本国際交流基金に招請され、フェローシップとしてそれぞれ国学院大学と東海大学において日本文学を研究。1998年から愛知文教大学専任教授および大学院日中文化・文学専攻および古典漢文学の指導教授を担当し、今に至る。

5・鄭茂清（2011年）（台湾）

鄭茂清氏は台湾大学の中国語学部で学んだ後、米プリンストン大学で東アジア学の博士課程に進み、その間に日本で研究をした経験がある。米カリフォルニア大学パークレー校やマサチューセッツ大学、台湾大学日本語学部、東華大学中国語学部などの教壇に立つ。著作には「日本における中国文学」があり、吉川幸次郎の「元雜劇研究」や「宋詩概説 中国詩人選」、「元明詩概説 中国詩人選」、松尾芭蕉の「おくのほそ道」などを翻訳した経験を持つ。

まず冒頭一節の5本の翻訳を比較する。形式として日本古典文学新全集『松尾芭蕉集』2「紀行・日記編」により原文をあげ、5本の翻訳本の中国訳とおよび鄭氏による日本語訳を掲げる。

【原文】

〔一〕

月日は百代の過客にして、行かふ年も又旅人也。舟の上に生涯をうかべ、馬の口とらへて老をむかふるものは、日ゝ旅にして旅を栖とす。古人も多く旅に死せるあり。予もいつれの年よりか、片雲の風にさそはれて、漂泊のおもひやまず、海浜にさすらへて、去年の秋江上の破屋に蜘蛛の古巣をはらひて、やや年も暮、春立る霞の空に白川の関をこえむと、そゞろがみの物につきてこゝろをくるはせ、道祖神のまねきにあひて、取も手につかず。もゝ引の破をつゞり、笠の緒付かへて、三里に灸すゆるより、松嶋の月先心にかゝりて、住る方は人に譲りて、杉風が別荘に移るに、

草の戸も住替る代ぞ雛の家

面八句を庵の柱に懸置。

①張香山訳『奥州小道』^(注2)

奥州小道^①

日月は百代の过客，去而复来的年年岁岁也是旅人。在船上度其一生的人，或牵马辔而终老的人，每天都在旅行，并且是以旅次为家的。古人^②死于羁旅中的很多。不知从哪一年起，看到被风荡漾的一片孤云，诱发我不停地向往着流浪他乡。

去年，漫游滨海各地，秋季返江^③畔的破屋，扫去蜘蛛住下，不久过年了。当天空笼着云霞的春天来临时，就想翻越白川关^④。为此我如同被诱惑神所缠，弄得心慌意乱，而道祖神^⑤亦来相邀，更使我不能安心做事了。于是补缀好细筒裤的破绽，换上了斗笠的系带，灼灸三里^⑥穴位之后，浮到心上的，首先是松岛之月。把住房卖给他人，迁居到杉风^⑦的别墅中。

如偶人^⑧从箱中移到坛上，

连草庵^⑨也有人移住，

这世间的习俗。

把第一面8句^⑩的诗帖，悬挂在草庵的木柱上。

注释：

① 奥州小道：日本南北朝时代（1333—1392）是指多贺国首府到盐釜的道路；战国时代（1467—1568）则指从仙台到松岛道路上的岩切这一带。据日本学者考证，芭蕉沿着奥羽街道寻访名胜古迹，或向左拐，或向右折，所经之处，统名之为奥州之道。这部游记所记述的旅程包括从江户出发，经北路奥羽到美浓的大垣，奥州小道仅为其中的一小段，但却是这部游记所着重记述的。

- ② 古人：指古时诗人，中国的杜甫，李白，日本的西行，宗祇。
- ③ 江：指江户（今东京）隅田川。
- ④ 白川关：允恭天皇（据推测在纪元前4世纪中叶到5世纪初）时建造，镰仓时代（1193—1332）似已倒塌，到江户时代（1603—1867）已成为荒废的古关。
- ⑤ 道祖神：在路上守护行人的神。
- ⑥ 三里：针灸穴位，灸后使行走轻快。
- ⑦ 杉风：姓杉山，为芭庵门人。
- ⑧ 偶人：每年3月3日女儿节时把着古装的偶人，从箱中取出，陈列在坛上。
- ⑨ 草庵：指芭蕉所居住的芭蕉庵。
- ⑩ 第一面8句：书写俳谐连句的诗帖，通常折叠成几面。如连句在50句以上，则第一面一般抄录8句，称第一面8句。文中的俳句，是第一面8句中的第一句，称发句。

〈張香山訳の日本語訳〉

奥州の小道^①

日月は百代の過客であり，行ってまた戻ってくる年月も旅人である。船で生涯を尽きる人，あるいは馬の轡を引いて最期を迎える人は，毎日旅をしており，旅先の宿を家としている。古人^②には旅先で亡くなった人がとても多い。いずれの年からか，風に吹かれた一片の孤雲を見ると，異郷に憧れるようになり流浪に誘われるようになった。

海辺の各地で漫遊し，秋に川^③のほとりの檻樓屋に戻り，蜘蛛の巣を吹き払って住み込み，やがて年越をした。空が霞に覆われている春が訪れる時，白川の関^④を越えようと思った。私は誘惑の神様に惑わされ，慌てて度を失った。道祖神^⑤も誘いに来て，ますます心が落ち着かなくなった。細いズボンのほころびを繕い，笠の緒を取替え，三里^⑥に灸をすえた後，心にまず浮かんだのは，松島の月である。住む処を他人に売り，杉風^⑦の別荘に引っ越す。

人形^⑧が箱から壇上に移されるように，

この草庵^⑨までにも引っ越してくる人がいる。

この世の中の風俗。

第一枚目の八句^⑩の詩を草庵の木の柱に掲げた。

注釈：

①奥の細道：日本南北朝時代（1333—1392）では多賀国の首都から塩釜までの道を指している。戦国時代（1467—1568）では仙台から松島まで途中にある岩切のあ

たりを指している。日本の学者の考察によると、芭蕉は奥羽の道に沿って、名勝旧跡を訪ね、左へまがるや、右へまがるとか、至る所を、すべて奥州の道と名付けた。この旅行記で記録した旅は、江戸から出発して、北路奥羽を経て、美濃の大垣まで含まれており、奥の細道はその中の短い一部しかないが、この旅行記が主に描く部分である。

②古人：昔の詩人を指している。中国の杜甫、李白、日本の西行、宗祇。

③江：江戸（今の東京）の隅田川を指している。

④白川関：允恭天皇（推測によると、紀元前4世紀中頃から5世紀始めまで）の時に建てられ、鎌倉時代（1193－1332）にすでに倒れたようであるが、江戸時代（1603－1867）になると荒れ果てた古い関となった。

⑤道祖神：道中で旅人を守る神様である。

⑥三里：灸を据えるツボである。灸を据えると、歩きやすくなる。

⑦杉風：苗字は杉山であり、芭蕉の門人である。

⑧人形：毎年3月3日雛祭りの時に、昔の服装を着ている人形を、箱から取り出し、壇上に並べる。

⑨草庵：芭蕉が住む芭蕉庵を指している。

⑩第一面8句：俳諧連句が書かれた詩帖、通常は何面に折り畳まれている。例えば、連句が50句以上の場合、第一面に普通8句を書き写し、第一面8句と呼ぶ。文の中の俳句は第一面8句の第一句であるため、発句と称す。

②陳岩訳『奥州小路』（注3）

（陳岩氏は日本語の原文を挙げながら、原文に中国語の注をつけて、さらに中国語訳を付ける形で訳している。）

おくのほそ道^①

一、漂泊の思い

月日は百代の過客にして^②、行かふ年も又旅人也。舟の上に生涯をうかべ、馬の口とらへて老をむかふる物は、日々旅にして旅を栖とす。古人^③も多く旅に死せるあり。予もいづれの年よりか、片雲の風にさそはれて、漂泊の思ひやまず、海浜にさすらへ、去年の秋^④江上の破屋^⑤に蜘蛛の古巣をはらひて、やや年も暮、春立る霞の空に白川の関^⑥をこえんと、そぞろ神の物につきて心をくるはせ、道祖神^⑦のまねきにあひて、取も手につかず。もも引の破をつゞり、笠の緒付かへて、三里^⑧に灸すゆるより、松嶋^⑨の月先心にかゝりて、

住る方は人に譲り、杉風が別墅^⑩に移るに、
 草の戸も住替る代ぞひな^⑪の家
 面八句^⑫を庵の柱に懸置。

[注解]

- ①奥州小路：原为奥州地区羊肠小道之意，芭蕉时代演变成特指的一条道路，即从仙台市东北部，旧岩切村今市始，到多贺城町市川的道路。芭蕉取此为书名，意在暗示旅途的漫长，寂寥。芭蕉旅经之地，已大大超出了上述范围。
- ②借用李白《春夜宴桃李园序》“夫天地者万物之逆旅，光阴者百代之过客，而浮生若梦”中句。
- ③指芭蕉素来敬慕的诗人，和歌诗人，如中国的杜甫，李白，日本的西行，宗祇等。
- ④指结束更科旅行回到江户的贞享五年（1688年）。
- ⑤指位于隅田川畔的芭蕉庵。
- ⑥百川关：通往奥州的关隘。（详见本书十二）
- ⑦路神：为设在村境，山冈，十字路口，桥旁等保当地平安之神。这里指行路神，保旅途平安之神。
- ⑧足三里：穴位名。传说用艾灸可是腿脚强健。
- ⑨松岛：位于宫城县松岛湾。日本三景之一。（详见本书二四，二五，二六）
- ⑩杉风本名杉正元雅，蕉门十哲之一。别墅指位于深川六间崛西侧的采茶庵。
- ⑪日本每年三月三日女儿节有陈列偶人的习俗。
- ⑫百韵连句：连句，俳谐的基本形式，一卷百句，写在第一张纸上的前八句。

一、漂泊之意

日月如百代过客，去而复返，返而复去。艄公穷生涯于船头；马夫引缰辔迎来老年，日日羁旅，随处栖身。古人毕生漂游，逝于途次者屡见不鲜。吾不知自何日始，心如被风卷动的流云，漫游之志难以遏止。吾尝延宕于遥远的海疆，去秋，始返回隅田川畔的陋室。拂去蛛丝尘网，暂且栖居。倏尔，岁暮春归，霞光泛彩，便又想跨越百川之关。兴起，如神使鬼差，心旌摇曳，又似路神之邀，急切难耐。于是，吾补缀破袴，更换笠带，施艾于足三里，而松岛之月早浮荡胸间。吾卖却旧居，移迁杉风别墅。行前，将百句吟起首八句就挂于庵柱之上。

草庐易新主
 适值三月列人偶
 荒凉变丽都

〈陳岩訳の日本語訳〉

[注解]

- ①奥州小路：元々は奥州地区の羊腸小径の意味であり、芭蕉の時代では特定の道を指すようになった。すなわち、仙台市東北部の旧岩切村今市より、多賀城町市川までの道である。芭蕉はこれを書名にしたのは、旅が長くて寂しいというのをほのめかすためである。芭蕉が旅で通った地域は上述した範囲より遥かに超えている。
- ②李白の『春夜宴桃李園序』の「夫天地者万物之逆旅，光陰者百代之過客，而浮生若夢」を転用している。
- ③芭蕉が以前から慕う詩人と歌人を指している。例えば、中国の杜甫，李白，日本の西行，宗祇等。
- ④更科の旅行を終えて江戸に帰った貞享五年（1688年）を指す。
- ⑤隅田川のほとりにある芭蕉庵を指す。
- ⑥白川の関：奥州に通じる関。（詳しくは本書の十二をご参照）
- ⑦路神：村の境目，小山，十字路，橋の傍らに設置されて，現地の安全を守る神である。ここでは行路神，旅の安全を守る神を指す。
- ⑧足三里：ツボの名称。ヨモギ灸をすえると足を強健にすることができると言われている。
- ⑨松島：宮城県松島湾にある。日本三景の一つ。（詳しくは本書二四，二五，二六をご参照）
- ⑩杉風の本名は杉正元雅で，蕉門十哲の一人。別荘は深川六間嶋の西側にある采茶庵を指す。
- ⑪日本では毎年三月三日の雛祭りに人形を並べる風習がある。
- ⑫百韻連句：連句，俳諧の基本形式であり，一卷百句，一枚目の紙に書かれた最初の八句である。

一、漂泊の意

日月は百代の過客のようであり，去ってはまた戻り，戻ったらまた去っていく。船頭は船先で人生を尽くし，馬子は手綱を引いて老年を迎える。日々羈旅し，至る所に泊まる。古人には一生漂泊して旅先で亡くなる人がしばしば見られる。いつから始まったのかは知らないが，私は心が風に吹かれて流れている雲のようになり，漫遊する志を抑えることができない。遥か遠くにある海辺でさすらったことがあるが，去年の秋，ようやく隅田川のほとりにある粗末な家に帰った。埃まみれの蜘蛛の巣を拭き払い，しばらく住んでいた。早くも年が暮れて，春が戻り，霞は色とりどりに輝き，また百

川の関を越えようと思った。興に乗って、神仏に振り回されたように、心が散漫となり、また道の神に誘われたようで、焦る気持ちを耐えがたい。私は破れたズボンを繕い、笠の緒を付け替えて、三里に灸を据えたが、松島の月が既に胸中に浮かんでいた。私は旧居を売り、杉風の別荘に移った。行く前に、百句の最初の八句を詠み、庵の柱に掲げた。

草庵も住人が替わることになる。

ちょうど人形を並べる三月である。

わびしさが華やかさになる。

③鄭民欽『奥州小道』^(注4)

(この訳本のタイトルは「奥州小道」というが、中には「奥の細道」だけでなく、「更科紀行」や「嵯峨日記」などの紀行文と「乞食の翁」や「寒夜の辞」などの俳文の訳も収録されている。また、鄭民欽訳は頁ごとに注の番号が変わるので、ここでは便宜上注の前後の順番で番号をふりなおす。)

奥州小道^①

旅思

日月乃百代之过客^②，周而复始之岁月亦为旅人也。浮舟生涯^③，牵马终老^④，积日羁旅，漂泊为家。古人^⑤多死于旅次，余亦不知自何年何月，心如轻风飘荡之片云，诱发行旅之情思而不能自己。乃流连于海滨，去秋^⑥甫回江上陋屋^⑦，扫除积尘蛛网。未久岁暮，新春迭至。每望霭霞弥天，即思翻越白川关隘^⑧，心迷于步行神^⑨，痴魔狂乱；情诱于道祖神^⑩，心慌意乱。乃补缀紧裤脚，新换斗笠带，针灸足三里^⑪，心驰神往于松岛之月^⑫。遂将住处^⑬让与他人，移居杉风别墅。^⑭

草庵已换主，

女儿节里摆偶人，

欢乐满牖户。

作表八句^⑮悬于草庵柱上^⑯。

- ①元禄二年（1689）二月下旬，芭蕉由曾良陪同，从江良出发，步行于关东，奥羽，北陆，经日光，白河，松岛，平泉，尾花泽，出羽三山，酒田，泉泻，云崎，金泽，福井，敦贺诸地，九月抵大垣，然后去伊势。旅程二千四百公里，历时六个月。《奥州小道》是这一段旅行的纪行文，于五年后，即1690年完成。
- ②李白《春夜宴桃李园序》：“夫天地者万物之逆旅，光阴者百代之过客，而浮生若梦。”
- ③指船夫。
- ④指马夫。
- ⑤芭蕉以日本的西行，宗祇，中国的李白，杜甫为风雅之道的先人。西行于河内弘川寺，宗祇于箱根汤本，李白于浔阳，杜甫于洞庭湖畔客死。
- ⑥芭蕉于贞享五年（1688）八月结束更科旅行回到江户。
- ⑦指江户隅田川畔深川的芭蕉庵。
- ⑧百川（白河）关，通往奥州的关隘。能因法师吟咏“云霞迷蒙京都天，秋风吹拂白河关”。
- ⑨原文为“そぞろ神”，一般认为是民间信仰的俗神“步行神”，也有的认为是芭蕉为与下文的“道祖神”相对应的造语，是使人心神不定的神或诱人出门旅行的神。
- ⑩道祖神，保佑旅人平安的路旁的神。
- ⑪灸此处可健腿。
- ⑫松岛，奥州最著名的风景。在宫城县松岛湾内，由二百六十多个岛屿组成。日本三景之一。吟咏松岛赏月的和歌最多。
- ⑬指芭蕉庵。
- ⑭杉风，即杉山元雅，芭蕉门人，在江户日本桥经营鱼行。是芭蕉的经济后援者。别墅，指深川六间崛的采茶庵。
- ⑮百韵连句中将发句及其后的七句写在第一章怀纸（书写和歌的一种日本纸）上，称为表八句。
- ⑯将怀纸悬于柱上作为临别纪念是当时习惯。

〈鄭民欽訳の日本語訳〉

奥州小道^①

旅の思い

日月は百代の过客^②であり，一周してまた始まる歳月も旅人である。船の上で送る人生^③また馬を引いて最期を迎え^④る人生は長年羈旅して，漂泊を家としている。古人^⑤は旅先で亡くなることが多い。私もまた何年何月からか分からないが，心は風に乘って漂う一片の雲のようになり，旅の思いがくすぐられて，抑えることができない。

そのため、海辺でさすらい、去年の秋^⑥、ようやく川のほとりにある粗末な家^⑦に帰った。埃まみれの蜘蛛の巣を拭き払った。しばらくして、年が暮れて、新春が続いてやってきた。満天の霞を見るたびに、白川の関^⑧を越えようと思った。心は歩きの神^⑨に惑わされ、狂ったように無我夢中になり、感情は道祖神^⑩に誘われて、心が惑乱した。すぐズボンを繕い、笠の緒を新しく付け替えて、三里^⑪に灸を据え、心は松島の月^⑫に行っている。それで、住居^⑬を他人に譲り、杉風の別荘に移る。^⑭

草庵は既に主が替わった。

雛祭りに人形を並べ、

喜びは家に満ちる。

面八句^⑮を作って草庵の柱に掲げた^⑯。

①元禄二年（1689）2月下旬、芭蕉は曾良の付き合いの下、江良より出発し、関東、奥羽、北陸を歩きまわり、日光、白川、松島、平泉、尾花澤、出羽三山、酒田、泉潟（字の間違いがある。「象潟」のはずである）、雲崎、金沢、福井、敦賀などのところを経て、九月に大垣に到着し、その後は伊勢へ向かう。旅は二千四百キロメートルがあり、六ヶ月間がかかった。『奥の細道』はこの旅の紀行文であり、その後の五年後に、すなわち1690年に完成した。

②李白『春夜宴桃李園序』に「夫天地者万物之逆旅，光陰者百代之過客，而浮生若夢」とある。

③船頭を指す。

④馬子を指す。

⑤芭蕉は日本の西行、宗祇、中国の李白、杜甫を風流の道の先例とする。西行は河内弘川寺、宗祇は箱根湯本、李白は潯陽、杜甫は洞庭湖のほとりで客死した。

⑥芭蕉は貞享五年（1688年）八月に更科の旅を終えて江戸に帰ったのである。

⑦隅田川のほとりにある深川の芭蕉庵を指す。

⑧白川（白河）の関、奥州へ通じる関である。能因法師は「都をば霞とともに立ちしかど秋風ぞ吹く白河の関」を歌った。（雲霞でぼんやりとした京都の空、秋風は白河の関を吹く。）

⑨原文では「そぞろ神」であり、一般的には民間で信仰される俗神の「歩行神」だと思われるが、芭蕉が次の「道祖神」に呼応するために作った言葉だと主張する人もいる。人の心を乱す神や人に出かけさせる神である。

⑩道祖神、旅人の安全を守る道の傍らの神である。

- ⑪ここに灸をすえると足をよくすることができる。
- ⑫松島，奥州の最も著名な風景である。宮城県の松島湾にあり，二百六十余りの島からなっている。日本三景の一つ。松島での月見を歌う和歌が最も多いのである。
- ⑬芭蕉庵を指す。
- ⑭杉風，即ち杉山元雅，芭蕉門人。江戸の日本橋で魚業を経営していた。芭蕉の経済支援者である。別荘は深川の六間堀の茶庵を指す。
- ⑮百韻連句の中では発句とその後の七句を一枚目の懐紙（和歌を書く日本紙の一種）に書く。表八句と称する。
- ⑯懐紙を柱の上に掲げることで別れを記念するのは当時の習慣である。

④陳徳文訳『奥州小道』^(注5)（小学館日本古典文学全集を参考）

（一）

日月乃百代之过客，去而复来的旧岁新年也是旅人。浮舟江海送走一生和执轡牵马迎来自老迈的人，日日都在旅行，长久羁旅异乡。古人多有死于行旅之中者。予不知从何年起，风吹片云，激起漂泊之思。去年秋，浪迹海滨归来，^①拂去江上破屋陈旧的蛛网，住到年关。而今又想起趁着云霞暖日的芳春，越过白河关口。^②仿佛邪魔附身，心烦意乱，好像神佛招引，欲罢不能。缝好裤子上的破绽，换上斗笠的带子，针过了“足三里”，心中早已记挂着松岛的明月。将住居转让他人，迁往杉风^③之别墅。

寂寞草庵易新主，桃花三月列偶人。^④

此句书于纸，挂在草庵的门柱上。

①此指贞享五年（元禄元年）八月的更科旅行。

②位于今福島县白河市。

③杉山杉风，芭蕉门人。

④三月桃花节，女孩们列偶人庆祝自己的节日。

〈陳徳文訳の日本語訳〉

（一）

日月は百代の过客であり，去ってまた来る古い年と新しい年も旅人である。江海で船を浮かべながら一生を送るのと轡を取って年を取る人は，毎日旅しており，長い間

異郷で羈旅する。古人には旅の中で亡くなるものが多い。いずれの年から、風は片雲を吹いて、私は漂泊の思いを引き起こされた。去年の秋、海辺をさすらって帰り、^①江上の檻樓屋の古い蜘蛛の巣を拭き払い、年末まで住んだ。しかし、今はまた雲と霞が濃厚の春のうちに、白川の関を越えようと思う。^②邪なものにとり付かれたようになり、心が苛立って思いが乱れる。神仏に招かれたように、気持ちを抑えることができない。ズボンのほころびを縫い合わせ、笠の緒を取替え、足の三里を据えながら、心ではとっくに松島の明月を気にしていた。住む所を他人に譲り、杉風^③の別荘に移る。

寂しい草庵は新しい主に変わり、
桃の花の三月に、人形を並べる。^④

この句を紙に書いて、草庵の門の柱に掛けた。

- ①ここでは貞享五年（元禄元年）八月の更科旅行を指す。
②今の福島県の白河市にある。
③杉山杉風、芭蕉門人。
④三月桃花節句、女の子たちは人形を並べて自分の節句を祝う。

⑤鄭茂清『奥之細道』^(注6)（尾形侑氏の注釈などを参考）

一、漂泊之思

月日者百代之過客，來往之年亦旅人也^①。有浮其生涯於舟上，或執起馬鞭以迎老者，日
日行役而以旅次為家^②。古人亦多有死於羈旅者^③。不知始於何年，余亦為吹逐片雲之風所
誘^④，而浪跡海濱^⑤。去年秋，返回江上破屋^⑥，拂其蜘蛛老網。歲聿其暮，立春旋至，仰望
天際，雲興霞蔚，則思穿越白河關口^⑦。驛馬星動而憑依於身^⑧，心亂若狂；道祖神來而頻
招其手^⑨，無計奈何；乃補綴破褲筒，更換斗笠帶，艾灸三里穴^⑩。而松島之月早懸於心矣^⑪；
爰讓居處於人，移至杉風別墅^⑫。

草庵依然
終有遷讓時節
雛偶人家^⑬

臨行，懸表八句於庵柱之上^⑭。

- ①《奥之細道》（以後簡稱《細道》）第一章開宗明義首句，明顯蹈襲李白〈春夜宴桃李園序〉：「夫天地者萬物之逆旅，光陰者百代之過客。」唯李白繼云：「而浮生若夢，為歡幾何？古人秉燭夜遊，良有以也。況陽春召我以煙景，大塊假我以文章。」旨在抒發人生苦短，及時行樂之意。而芭蕉則強調人生即旅，諸行無常之觀。「月日」即光陰。不稱「日月」而稱「月日」者，一則沿用日文慣例，二則兼指月亮與太陽，與下出「來往之年」，同屬擬人修辭。李白之「逆旅」偏重包容萬物，當下此刻之空間，而芭蕉之「過客」，「旅人」，則隱喻流動不居之時間。
- ②指船夫與馬夫。芭蕉以「無所住」之旅為家，云：「以無庵為庵，以無住為住。」（尾形仿《おくのほそ道評釋》引阿刀本〈幻住庵記〉）。又致正秀函：「極度浮雲無住之境界，故乃如此漂泊。」（元祿四年正月十九日）。《細道》〈一四，飯塚裏〉章云：「羈旅邊地之行腳，捨身無常之觀念，即或死於道路，是亦天命也。」案：陶潛亦以此生為旅，其絕筆〈自祭文〉云：「陶子將辭逆旅之館，永歸本宅。」本宅猶今人所謂「老家」，喻死亡。白居易〈秋山〉：「人生無幾何，如寄天地間。」蘇軾〈和陶擬古〉：「吾生如寄耳，何者為吾廬。」又〈過淮〉：「吾生如寄耳，初不擇所適。」
- ③「古人」，指芭蕉仰為典範之古代詩歌大家。諸註所提者不下十人，包括日本歌僧西行上人（一一一八—一一九〇），連歌師宗祇（一四二一—一五〇二），中國詩人李白（七〇一—七六二），杜甫（七一—七七〇）。李白長期漂泊，卒於當塗；杜甫離蜀至湘，客死舟中；西行上人，俗名佐藤義清，往生於河內國（大阪府）弘川寺；宗祇法師，飯尾氏，寂滅於箱根湯本早雲寺，皆可謂「死於羈旅者」。
- ④杜甫〈江漢〉：「片雲天共遠，永夜月同孤」又〈野老〉：「長路關心悲劍閣，片雲何事傍琴臺。」又〈秦州雜詩二十六首之十六〉：「落日遡雙鳥，晴天卷片雲。」案：蓑笠庵梨一編《奧細道菅菰抄》（一七七八）（以後《菅菰抄》）云：「有『一片孤雲逐吹飛』之詩趣。」未審出處。支考述，不玉撰《葛の松原》（一六九二）引芭蕉語云：「如對片雲之風。」（片雲の風に臨めるがごとし）
- ⑤芭蕉於貞享四年（一六八七）陰歷十月下旬出門，歷遊尾張，三河，大和，紀伊，攝津，播磨等國。翌年四月返回江戶芭蕉庵。期間曾「浪跡」鳴海，伊良古崎（一作伊良湖崎），和歌浦，須磨，明石等「海濱」（事見芭蕉《笈の小文》等相關紀行之作）。案：日本政治史上直至江戶時代，仍屬封建體制。故所謂「國」，指「京畿」外之地方封地，或曰「藩」，相當（或較小）於明治以來「都，府，縣」之地方行政區劃。封地統治者曰國守，國主或藩主，通稱大名。
- ⑥「去年秋」當指貞享五年陰歷八月下旬（九月起改元元祿），芭蕉自《笈の小文》與《更科紀行》之旅返江戶之時。「江上破屋」在隅田川畔，即「深川本番所森田惣左衛門御屋敷（宅邸）」內之第二次芭蕉庵。芭蕉有〈閑居箴〉，〈芭蕉庵十三夜〉等俳文言及之。

⑦「白河關」為古代通往陸奥之重要關口。著名歌枕。傳設於允恭天皇（在位四一二—四五三）之世，以防蝦夷入侵。其後經平安時代至鎌倉時代，形同廢棄。德川時代，關址已失其跡，一說以為在今福島縣白河市旗宿。參《細道》〈一一，白河關〉章。

⑧「驛馬星」，原文「そゝろ神」，究為何種神祇，迄無定論。諸註均認為應與旅遊有關，或即日本民俗「步行神」之類。中國有「驛馬星動」之說，謂將有遠行，遷徙或赴任之兆也。並非恰譯，以類比之耳。「驛馬星」或稱「走星」，主司行旅之神。

⑨「道祖神」，防遏路上惡魔，保護旅人安全之神。類似臺灣土地公，一般祀於村口或橋畔，但其神像或作男女相擁之形，令人莞爾。

⑩其日菴馬場錦江編《奧細道通解》（以後《通解》）引〈日用灸法〉云：「三裏二穴在膝下三寸，胫骨之外，大筋之內。一說，在膝眼下三寸。」據云，有嘔噎，腹脹，水腫，便血，上氣，目眩，胃氣虛弱者，灸之必靈。芭蕉於同年四月廿六日自須賀川致衫風書云：「出發前針灸，頗覺有效。逗留〔在外〕期間，擬再針灸腿腳。」

⑪「松島」，著名歌枕，自古詠「松島之月」之歌甚多。與「平泉」，「象瀉」同為芭蕉此次《細道》行腳之三大勝地，行前已心嚮往之矣。「松島」泛指今宮城縣宮城郡松島町松島灣內外兩百六十餘大小諸島，與海灣一帶之名勝地區。余詳《細道》〈二一，松島〉章。

⑫「居處」指芭蕉庵，即文中之「江上破屋」。衫風（一六四七—一七三二），俳號。衫山氏，通稱鯉屋市兵衛，日本橋小田原町幕府御用海鮮批發商。蕉門早期弟子及贊助人。小芭蕉三歲，卒於享保十七年，享年八十六。「別墅」指衫風別宅，宅名「采茶庵」，蓋取自《詩·邠風》〈七月〉：「采荼薪樗，食我農夫。」位於「深川六間堀西側」，與芭蕉庵近在咫尺。

⑬原文「草の戸も 住替る代ぞ ひなの家」案：三月三日為日本女兒節（原依陰歷，今據陽歷），日人稱為「雛祭り」或「雛の節句」。「雛」（ひな）為「雛人形」之略，即小型偶人。有內裏雛，座雛，親王雛等。家有少女者，輒在家中設置「雛壇」，有上而下呈階梯形，擺列雛偶。男女必成對，皆飾以古裝：男偶束帶，女偶十二單。並供以麥餅，桃花，白酒等物，所以祛邪保平安也。又案：此句當作於芭蕉讓出芭蕉庵之後，開始《細道》之旅之前。麥阿撰《世中百韻》（一七三七）引芭蕉此句初稿所作前言云：「將有遠遊，遙想天涯迢遞，不容瑣屑小時，纏擾於心。乃以向往所住小庵讓於相識，此人有妻室，女兒與孫輩。」另有書信書封亦言及此事。可知承讓芭蕉庵者，乃其「相識」，且恰逢女兒節，故不能免俗，布置草庵為「雛偶人家」，與芭蕉居住時簡樸風雅之趣，大相徑庭。

⑭「表八句」，原文多做「面八句」。表與面訓同（おもて），謂正面，表面也。與「裡」（うら，背面，裏面或反面）為反義詞，如漢語「表，裏」之相對。所謂表八句，即俳諧連句「初表八句」之意。依慣例，寫連句百韻（句）時，用「懷紙」（詩箋）四張，每張摺疊為二，成一表一裏。第一張之表即「初表」，寫八句，裡十四句；第二，第三張表，裡各十四句；第

四張為「名残」（なごり）、即尾聲或餘波、表十四句、裡八句、若寫連句五十韻（句）、則用懷紙二張、「初表」寫八句、其余表、裡各十四句。若是「歌仙」（三十六句連句）、則用懷紙二張、「初表」與「名残之裡」各寫六句、其余表裡各十二句。（詳久富哲雄、《おくのはそ道・全訳註》）、頁十九）。案：芭蕉所謂「表八句」、到底是百韻連句抑或五十韻連句之「初表」、並未明言。或以此「草庵」（草の戸）句、為芭蕉獨吟「表八句」之發句（連句首句）。但如確有其事、卻乏任何佐證資料、即其門生亦未有提及之者。或以為「懸表八句於庵柱」云云、蓋出自芭蕉之虛構、可備一說。

〈鄭茂清訳の日本語訳〉

一、漂泊の思

月日は百代の過客であり、行ってまた戻る年も旅人である^①。自らの生涯を船に浮かべて過ごす人や、鞭を持って老いを迎える人がいる。日々を旅し、旅先を家とする^②。古人にも旅先で亡くなるものが多い^③。何年から始まったかは知らないが、私も一片の雲を吹いて追いかける風に誘惑され^④、海辺でさすらっていた^⑤。去年の秋、川の上の檻樓家^⑥に帰り、蜘蛛の古い巣を拭き払った。年は早くも暮れ、立春はすぐに来た。空の果てを眺めると、雲が盛んとなって霞が彩り、白河の関^⑦を越えることを考えた。驛馬星（そぞろ神）が動き、身に憑き^⑧、心が乱れて狂ったようになる。道祖神が来てしきりに手招きをし^⑨、どうしようもない。そのため、破ったズボンの筒を繕い、笠の緒を取り替え、三里に灸を据えた^⑩。松島の月は早くも心に掛けていた^⑪。そこで住む場所を人に譲り、杉風の別荘に移る^⑫。

草庵は相変わらずのである。

やがて（他人に）譲る時節が来る。

雛人形の家^⑬。

出発間際に、表八句を庵の柱の上に掲げた^⑭。

①『奥之細道』（以後は簡略して『細道』と称す）の第一章の主旨を明らかにする一句目は、明らかに李白の「春夜宴桃李園序」：「夫天地者萬物之逆旅，光陰者百代之過客」を踏まえている。ただ、李白はその続きに「而浮生若夢，為歡幾何？古人秉燭夜遊，良有以也。況陽春召我以煙景，大塊假我以文章。」といている。その主旨は人生が苦しくて短いから、早めに享樂すべきという意を述べている。しかし、芭蕉は人生そのものが旅であり、諸行無常の考えを強調している。「月日」即ち光陰である。「日月」と言わず、「月日」というのは、一つは日本語の慣例に従うためであり、一つは月と太

陽を兼ねて指し、次の「來往之年」と同じく擬人的な修辞に属するものである。李白の「逆旅」は万物を包容することと現在のこの時の空間を強調することに偏るが、芭蕉の「過客」「旅人」は、流れていて止まらない時間を隱喩する。

②船頭と馬子を指す。芭蕉は「止ることない」旅を家とし、「庵のないことを庵とし、止まるのがないことを止まることとする。」(尾形昶『おくのほそ道評釋』引阿刀本〈幻住庵記〉)。また正秀宛ての手紙に：「極めて浮雲無住の境界を望む故、このように漂泊する。」(元祿四年正月十九日)。『細道』〈一四、飯塚裏〉の章によると、「辺境で羈旅する行脚、身を捨てて無常の觀念、あるいは道で死ぬ、これも天命である」。案ずるに、陶潛も人生を旅とし、その絶筆『自祭文』によると、「陶子將辭逆旅之館、永歸本宅」。本宅は、今の人が言う「ふるさと」のようなものであり、死を喩えている。白居易〈秋山〉：「人生無幾何，如寄天地間」。蘇軾〈和陶擬古〉：「吾生如寄耳，何者為吾廬」。又〈過淮〉：「吾生如寄耳，初不擇所適。」

③「古人」、芭蕉が模範として慕う古代の詩と歌の大家。諸注ではふれたものは十人以上もあり、日本の歌の僧西行上人（一一一八—一一九〇）、連歌師宗祇（一四二一—一一五〇二）、中国詩人李白（七〇一—七六二）、杜甫（七一—七七〇）。當塗でなくなった；杜甫は蜀から離れ、湘に至り、船の中で客死した；西行上人、俗名は佐藤義清で、河内国（大阪府）弘川寺で往生した；宗祇法師、飯尾氏、箱根湯本早雲寺で亡くなった。皆「羈旅でなくなった者」と言える。

④杜甫〈江漢〉：「片雲天共遠，永夜月同孤」。又〈野老〉：「長路関心悲劍閣，片雲何事傍琴台」。又〈秦州雜詩二十六首之十六〉：「落日遡双鳥，晴天卷片雲」。案ずるに：蓑笠庵梨一編『奥細道菅菰抄』（一七七八）（以後『菅菰抄』）によると、「『一片孤雲逐吹飛』の詩の趣がある。」出典不明。支考述し、不玉が撰した『葛の松原』（一六九二）では、芭蕉の言葉を引いて「如對片雲之風」と言っている（片雲の風に臨めるがごとし）

⑤芭蕉は貞享四年（一六八七）陰歷十月下旬に出かけ、尾張、三河、大和、紀伊、攝津、播磨等の国を歴遊した。翌年の四月江戸の芭蕉庵に帰った。その間、鳴海、伊良古崎（または伊良湖崎）、和歌浦、須磨、明石等の「海辺」（芭蕉『笈の小文』等相關紀行の作をご参照）で「さすらっていた」。案ずるに：日本政治史上、江戸時代に至るまではまだ封建体制に属するため、いわゆる「国」は、「京畿」以外の地方にある封地を指す。或は「藩」といい、明治以來の「都、府、縣」の地方行政区画に相当する（あるいはやや小さい）。封地統治者は国守、国主、或は藩主といい、通常は大名と称する。

⑥「去年の秋」は貞享五年陰歷八月下旬（九月より元祿に改元した）を指すべきである。芭蕉は『笈の小文』と『更科紀行』の旅から江戸に帰った時。「江上破屋」は隅

田川の畔にあり、即「深川本番所森田惣左衛門御屋敷（宅邸）」の中にある第二次芭蕉庵である。芭蕉は〈閑居箴〉、〈芭蕉庵十三夜〉等の俳文で、これにふれた。

⑦「白河関」は古代の陸奥へ通う重要な関である。有名な歌枕。允恭天皇（在位四一―二一四五）の時に、蝦夷の侵略を防ぐために作られたという。その後、平安時代を経て、鎌倉時代に至り、廃棄されたのと同様であった。徳川時代になると、その所在地は不明となり、一説は今の福島県の白河市旗宿にあるという。『細道』〈一一、白河関〉章をご参照。

⑧「驛馬星」、原文「そゝろ神」、一体どのような神であるか、未だに定説がない。諸注は旅行と関わりがあると思われる、あるいは、即ち日本民間の「歩行神」のようなものである。中国には「驛馬星動」という説があり、もうすぐ遠くへ出掛ける、引越す、或いは赴任することの兆しがあるという。または「走星」と称すものがあり、旅行を掌る神である。

⑨「道祖神」、道中の悪魔を防ぎ、旅人の安全を守る神。台湾の土地公のようなものであり、普通は村の入り口あるいは橋のほとりで祭られる。ただし、其の神像は、時に男女が抱き合う形となっており、微笑ましいことである。

⑩其日菴馬場錦江編『奥細道通解』（以後『通解』）では、〈日用灸法〉を引きながら、「三裏二穴は膝下三寸にあり、胫骨の外、大筋の内。一説、膝眼下三寸にあるという」と言っている。しゃっくり、鼓脹、浮腫、血便、息切れ、めまい、胃の弱い者は、ここに灸をすえると必ず効く。芭蕉は同年四月廿六日に須賀川で杉風宛ての書によると、「出発の前に灸をすえるとかなり効果があると思った。外に居る期間にも、再び足に灸を据えるつもりである」という。

⑪「松島」、著名な歌枕、昔から「松島之月」を詠う歌は甚だしく多い。「平泉」、「象瀉」と同じく、芭蕉がこの時、『細道』で行脚した三大の名勝であり、行く前に心の中では既に懂れている。「松島」は、大体今宮城縣宮城郡松島町松島湾の中と外にある二百六十余りの大きさがそれぞれの諸島、そして海湾あたりの名勝地区を指している。詳しくは『細道』〈二一、松島〉章をご参照。

⑫「居処」は芭蕉庵を指す。即ち文中の「江上破屋」。杉風（一六四七―一七三二）、俳号。衫山氏、通称鯉屋市兵衛、日本橋小田原町幕府の御用の海鮮の卸屋。芭蕉早期の弟子とパトロンである。芭蕉より三才年下で、享保十七年に死、享年八十六歳。「別墅」は杉風の別宅を指す。邸名は「采茶庵」であり、『詩経・幽風』「七月」の「采荼薪樗、食我農夫」から由来している。「深川六間堀西側」に位置し、芭蕉の庵と非常に近いのである。

⑬原文：「草の戸も 住替る代ぞ ひなの家」。案ずるに、三月三日は日本の女の子の節（もともとは旧暦によるが、現在は西暦に従う）であり、日本人は「雛祭り」や「雛の節句」と呼んでいる。「雛」（ひな）は「雛人形」の省略であり、即ち小型の人形である。内裏雛、座雛、親王雛などがある。少女がいる家には、家の中で「雛壇」を設置し、上から下まで、階段の形で雛人形を並べる。男女は必ず対となり、皆昔の服装で飾る。男の人形は帯を締め、女の人形は十二単である。そして、菱餅、桃の花、白酒などのものを供え、邪気を払い、無事安全を守るのである。また案ずるに、この句は芭蕉が芭蕉庵を譲った後、『細道』の旅を始める前のはずである。麦阿が著した『世中百韻』（一七三七）は芭蕉がこの句の初稿で作った前書きを引いて、このように言っている。「もうすぐ遠い旅がある。些細なことに惑わされる余裕がない。それで住んできた庵を知り合いに譲った。この人は妻、と孫を持っている」と。ほかに、このことに言及する手紙がある。芭蕉庵を引き受けた者が、その「知り合い」であったことが分かる。そして、ちょうど雛祭りの頃なので、世俗にこだわらないにはいかず、草庵を「雛人形の家」と飾り、芭蕉が住んでいた時の素朴で風雅な趣と大きく異なる。

⑭「表八句」、原文では「面八句」となっていることが多い。表と面の訓読みは同じく（おもて）であり、所謂正面、表面である。「裏」（うら、裏、中或いは反面）と反対語であり、中国語での「表」「裏」に対応する。表八句とは、すなわち俳諧連句「初表八句」の意味である。慣例によれば、連句百韻（句）を作る時に、「懐紙」（詩箋）四枚を用いる。一枚を中折して表と裏となる。一枚目の面は「初表」であり、八句を書き、裏は十四句である。二枚目と三枚目は、それぞれ表、裏は十四句である。四枚目は「名残」（なごり）であり、すなわち終わり或いは余韻であり、表は十四句で、裏は八句である。もし連句五十韻（句）を作る場合、懐紙二枚を使い、「初表」と「名残の裏」にそれぞれ六句を書き、そのほかは、表と裏にそれぞれ十二句を書く。（詳しくは、久富哲雄『おくのほそ道・全注釈』、頁十九）。案ずるに、芭蕉が言う「表八句」は、結局百韻連句のものか、それとも五十韻連句の「初表」であるか、ここでは明言していない。あるいは、この「草庵」（草の戸）の句を芭蕉独吟「表八句」の「発句」（連句の最初の句）としている。但し、もし確かにこの事があるとすれば、それを裏付ける資料は欠けている、即ちその門生もこのことに言及した人がいない。或いは「表八句を庵の柱にかけた」というのは、おそらく芭蕉の虚構によるものであり、これも一説として備える。

二 各訳分析

まず、タイトルを比較する。それぞれ、①張香山訳『奥州小道』②陳岩訳『奥州小路』③鄭民欽訳『奥州小道』④陳徳文訳『奥州小道』⑤鄭茂清訳『奥之細道』となっている。芭蕉は蕉門の能書家素龍に曾良本をさせた。それが素龍清書芭蕉所持本（西村本）で、元禄七年初夏に成り、芭蕉自から「おくのほそ道」と題箋を書き、やがて最後の旅に携行した。（日本古典文学全集解題）従ってこの題には芭蕉の思いが込められている。

このうち①張香山訳では、注に「日本の学者の考察によると、芭蕉は奥羽の道に沿って、名勝旧跡を訪ね、左へまがるや、右へまがるとか、至る所を、すべて奥州の道と名付けた。この旅行記で記録した旅は、江戸から出発して、北路奥羽を経て、美濃の大垣まで含まれており、奥の細道はその中の短い一部しかないが、この旅行記が主に描く部分である。」とある。この注も「陸奥」の「道の奥」つまり「最果て」という意識を込めて芭蕉が「おくの」と名付けた感覚を受け取っていない。それに対して②陳岩訳では「元々は奥州地区の羊腸小径の意味であり、芭蕉の時代では特定の道を指すようになった。すなわち、仙台市東北部の旧岩切村今市より、多賀城町市川までの道である。芭蕉はこれを書名にしたのは、旅が長くて寂しいというのをほのめかすためである。芭蕉が旅で通った地域は上述した範囲より遥かに超えている。」とあり、「旅が長くて寂しい」という芭蕉の思いが題に反映されていると考える点は注目すべきである。

奥州、陸奥への道は、事実、山間の道を通っていたとされ、旅した芭蕉の実感が込められている。しかし、陸奥の道の険しさは日本人ならば容易に思い浮かべられるが、最果ての陸奥というイメージを想像できない中国人にとっては「奥州」というどこかの「小路・小道」（細い道）という表題をつけている。その意識のずれを中国訳で表現できないという思いからか⑤鄭茂清訳は『奥之細道』とそのまま題にしたのであろう。

論じる都合上『奥の細道』本文を次の7つに区分けする。まず（1）月日は百代の過客にして、行かふ年も又旅人也。（2）舟の上に生涯をうかべ、馬の口とらへて老をむかふるものは、日、旅にして旅を栖とす。（3）古人も多く旅に死せるあり。（4）予もいづれの年よりか、片雲の風にさそはれて、漂泊のおもひやまず。（5）海浜にさすらへて、去年の秋江上の破屋に蜘蛛の古巣をはらひて、やや年も暮、春立る霞の空に白川の関をこえむと、そゞろがみの物につきてこゝろをくるはせ、道祖神のまねきにあひて、取も手につかず。（6）もゝ引の破をつゞり、笠の緒付かへて、三里に灸すゆるより、松嶋の月先心にかゝりて、住る方は人に譲りて、杉風が別荘に移るに、草の戸も住替る代ぞ雛の家（7）面八句を庵の柱に懸置。として旅立の作法を以て終わる。

(1)「月日は百代の過客にして、行かふ年も又旅人也」

この一文は李白の「春夜宴桃李園序」の「夫天地者万物之逆旅，光陰者百代之过客，而浮生若夢」に基づくことは従来から知られ，中国訳でも②陳岩訳では，注で「『春夜宴桃李園序』の「夫天地者万物之逆旅，光陰者百代之过客，而浮生若夢」を転用している。」と，また③鄭民欽訳の注で「李白『春夜宴桃李園序』に「夫天地者万物之逆旅，光陰者百代之过客，而浮生若夢」とある。さらに，⑤鄭茂清訳では「第一章の主旨を明らかにする一句目は，明らかに李白の「春夜宴桃李園序」：「夫天地者萬物之逆旅，光陰者百代之过客」を踏まえている。ただ，李白はその続きに「而浮生若夢，為歡幾何？古人秉燭夜遊，良有以也。況陽春召我以煙景，大塊假我以文章。」といている。その主旨は人生が苦しくて短いから，早めに享楽すべきという意を述べている。しかし，芭蕉は人生そのものが旅であり，諸行無常の考えを強調している。「月日」即ち光陰である。「日月」と言わず，「月日」というのは，一つは日本語の慣例に従うためであり，一つは月と太陽を兼ねて指し，次の「來往之年」と同じく擬人的な修辭に属するものである。李白の「逆旅」は万物を包容することと現在のこの時の空間を強調することに偏るが，芭蕉の「过客」，「旅人」は，流れていて止まらない時間を隱喩する。」と詳細に李白詩句と比較し，その違いにも言及されている。但しこの注は⑤鄭茂清氏自身が表明しているように尾形叡氏の解説をそのまま受け継いでいる。^(注7)

各訳を比較すると①張訳「日月は百代の过客であり，行ってまた戻ってくる年月も旅人である。」とほぼ同様に訳されている。この冒頭句は，芭蕉の人生觀そのものであり，「奥の細道」を理解する上で非常に重要である。翻訳する上では芭蕉の世界觀を伝える必要がある。旅そのものが人生という思いを注で解説すべきであり，尾形氏の孫引き的解説でも⑤鄭茂清訳のように芭蕉の世界觀の解説が必要であろう。

奥の細道の旅を終えた後，2年間上方に滞在する。しかし，その間に『奥の細道』は書かれなかった。元禄5年5月に芭蕉庵にしばらくたってから書き始め，何度も書き改めた後，元禄7年になって素龍に清書させ，自ら『おくのほそ道』と題箋を付した。「奥の細道」は，旅を通して得た「不易流行」の思想を十分熟成させてから書かれたものである。古典の修辭として歳月を旅人と述べているのではなく，自らの体を通して生まれた言葉である。

(2)「舟の上に生涯をうかべ，馬の口とらへて老をむかふるものは，日、旅にして旅を栖とす。古人も多く旅に死せるあり。」

この部分の各訳で問題となるのは，「旅を栖とす」である。①張訳「旅先の宿を家としている。」②陳岩訳では「至る所に泊まる。」③鄭民欽訳「漂泊を家としている。」④陳徳

文訳「長い間異郷で羈旅する。」⑤鄭茂清「旅先を家とする。」このうち⑤鄭茂清の注では「芭蕉は「止ることない」旅を家とし、「庵のないことを庵とし、止まるのがないことを止まることとする。」（尾形侑『おくのほそ道評釋』引阿刀本〈幻住庵記〉）。また正秀宛ての手紙に：「極めて浮雲無住の境界を望む故、このように漂泊する。」（元禄四年正月十九日）。『細道』〈一四、飯塚裏〉の章によると、「辺境で羈旅する行脚、身を捨てて無常の觀念、あるいは道で死ぬ、これも天命である」。案ずるに、陶潛も人生を旅とし、その絶筆『自祭文』によると、「陶子將辭逆旅之館、永歸本宅」。本宅は、今の人が言う「ふるさと」のようなものであり、死を喩えている」と解説されている。このように解説しながら⑤鄭茂清の訳らは、旅先で亡くなることも厭わないという俗世を捨てる意志のように解釈されているように思われる。ここでは、すべての人は人生という大きな旅の中で死んでいき、それは実は旅を生活の糧にしている船頭や馬子と同じなのだと言っていることを読み取るべきである。「旅」が人生を指していることを意識して訳すべきであろう。③鄭民欽訳以外は、行き先ごとに宿が変わるという点に解釈の重点がおかれている。「旅を栖とする」とは、一所不住としてしか生きられないことを意味している。尾形氏はこの部分「旅とはまさにこの人生を律する不変の根源的原理であり、旅の中に生涯を送り、旅に死ぬことは、その宇宙の根本原理にもとづく最も純粋な生き方なのだ。」と評された。また松隈義勇氏は「日々旅にして」の部分について「通説では「毎日毎日が旅であって」と解されているが、私見では「毎日毎日旅にあって」と解釈すべきであると思われる。^(注8)つまり「旅」をしているのではなく「旅」の中に生きているという意である。「旅を栖とす」は「無所住の旅に止住する」とし「芭蕉は無常觀を核心として、世間離脱の無用者即ち隱遁者たる道を選び、この世を仮の宿りと觀じ去って、一所不在の思いに徹しきろうとする。かくて行き着く所は漂泊を日常化する以外にはないという思念に止住する。彼の自覺としてはそれがまさに西行・宗祇等の系譜に連なる風雅の本質をなす一筋の道と信じたのである」と論じた。これによって冒頭の歳月は無機物としてではなく、人間の生涯の歳月が旅、人生即旅という意味をもつ。その芭蕉が込めた深い意味を中国訳本からは感じられない。

（4）「予もいづれの年よりか、片雲の風にさそはれて、漂泊のおもひやまず。」

ちぎれ雲が風に吹かれているのに自分が誘われるということは、ちぎれ雲を自分に見立っていると解釈できるが、各訳を見ると②陳岩訳の「私は心が風に吹かれて流れている雲のようになり」や③鄭民欽訳「心は風に乗って漂う一片の雲のようになり」のように風と雲と自己の関係を原文に即して訳しているといえる。漂泊の俳諧師の境涯に入った心懷を回顧しているが、『東関紀行』の『略さしていづこに住はつべしとおもひさだめぬありさま

なれば、彼白楽天の、身は浮雲に似たり首は霜ににたり略』等、中世紀行文に通じるものがあることが指摘されている。^(注9)

(5)「海浜にさすらへて、去年の秋江上の破屋に蜘蛛の古巣をはらひて、やや年も暮、春立る霞の空に白川の関をこえむと。」

まず「霞」の日本人的感觉が中国訳では難しい。①張訳「空が霞に覆われている春が訪れる時」、②陳岩訳「春が戻り、霞は色とりどりに輝き」③鄭民欽訳「新春が続いてやってきた。満天の霞を見るたびに」④陳徳文訳「今はまた雲と霞が濃厚の春のうちに」⑤鄭茂清訳「雲が盛んとなって霞が彩り、白河の関を越えることを考えた。」となっており、霞は白い霏状のものであり、真っ先に春を感じる素材であるから立春と結びつくという感覚が理解されていない。これは「霞」が中国では季節を問わない赤い採光という意があるためである。この部分能因の「都をば霞とともに立ちしかど秋風ぞ吹く白河の関」(後拾遺集・羈旅518・能因)を踏まえ、関の縁で霞の語を出して、都を旅立つことと霞が立つことを言い掛けたとされるが、新聞一美氏は(『奥の細道』と白居易の「三月尽」)は、白居易的発想も実は見られ、「旅をするのが「月」「日」「(行きかふ)年」から「(行く)春」になっている。」と解釈されている。つまり「春」こそが「百代の过客」なのであり、芭蕉とともに旅をする旅人なのである。」とし、さらに白河に向かうことも「春が東に帰るとともに東に向かうとも読める。」と述べる。さらに越えるとそこは陸奥の国との境目の関であるという歌枕「白河の関」への思いは、中国訳では理解しにくい。②陳岩訳では「奥州に通じる関」。③鄭民欽訳では「奥州へ通じる関である。」とし、さらに能因法師の「都をば霞とともに立ちしかど秋風ぞ吹く白河の関」を歌あげ、訳「雲霞でぼんやりとした京都の空、秋風は白河の関を吹く。」を付けている。⑤鄭茂清訳では「白河関」は古代の陸奥へ通う重要な関である。有名な歌枕。允恭天皇(在位四一二―四五三)の時に、蝦夷の侵略を防ぐために作られたという。その後、平安時代を経て、鎌倉時代に至り、廃棄されたのと同様であった。徳川時代になると、その所在地は不明となり、一説は今の福島県の白河市旗宿にあるという。」と注されている。「白河の関」に喚起される日本古典文学の歴史を解説する必要があると思われる。また「そゝろがみの物につきてこゝろをくるはせ、道祖神のまねきにあひて、取も手につかず」も①張訳「私は誘惑の神様に惑わされ、慌てて度を失った。道祖神^⑤も誘いに来て、ますます心が落ち着かなくなった。」②陳岩訳「興に乗って、神仏に振り回されたように、心がぼんやりとしてとなり、また道の神に誘われたようで、焦る気持ちを耐えがたい。」③鄭民欽訳「心は歩きの神^⑥に惑わされ、狂ったように無我夢中になり、感情は道祖神に誘われて、心が惑乱した。」④陳徳文訳「邪なも

のにとり付かれたようになり、心が苛立って思いが乱れる。神仏に招かれたように、気持ちを抑えることができない。」⑤鄭茂清訳「驛馬星（中国の星占いのような星座）が動き、身に憑き、心が乱れて狂ったようになった。道祖神が来てしきりに手招きをし、どうしようもない。」となっている。「そぞろ神」は、芭蕉の造語であり、日本の諸本でも「人の心をそそのかず神」（全集）、「心を浮き立たせる神」（芭蕉入門）「何とも得たいの知れない神」（尾形仿）と訳にばらつきがみえる。道祖神との対句となっているので、自分の内部の神と外部の神ともに旅に誘うと言いたいと思われる。中国人に馴染みのある「心」と「感情」の対に訳している③鄭民欽訳が適訳かもしれない。「取り手につかず」は心が旅にとらわれていて何も手につかないという状況なので、不安定であることは間違いないのだから、視点が自分になっている方が芭蕉の何かに急かされている心境を表現できるので、③鄭民欽訳や④陳徳文訳や⑤鄭茂清訳の方がいいように思う。最大の問題になるのが、俳句である。

（6）「住る方は人に譲りて、杉風が別荘に移るに、草の戸も住替る代ぞ難の家」

この句は翻訳の問題以前に大きく2点から日本の解釈自体が以前から論争となってきた。

この句は日本の解釈自体が以前から論争となってきた。まず「代ぞ」。この句は、「奥の細道」収録以前に『夜中百韻』『笈日記』に収められており、その時には「よや」となっていた。現在では「よや」を初形とし、「奥の細道」に収め直すにあたって推敲し「代ぞ」と変えたと一般的に理解されている。大谷徳蔵氏は（『日本古典文学大系45』『芭蕉句集』）は、「ぞ」と改めると「草の戸」に言い聞かせているようなひびきがあり、住みなれた草庵を人に譲って旅立つにあたって、今までと違って花やかなるべき前途を祝ってやった句になる。」と述べており、筆者も首肯する。^{（注10）}

一方、富山奏氏は「代ぞ」は初案というのは賛同できない。「住替る代ぞ」の形は、紀行文『おくのほそ道』の中のみ生きている。句を序章全体の締め括りとして再確認することである。」と唱え、自分自身に決別の決心を「代ぞ」として再確認し、その重々しい冒頭文章と一体となると指摘されている。^{（注11）} 大谷氏は庵への餞別、富山氏は旅立つ自分自身に奮い立たせる意と解釈に違いがあるが、「よや」なら詠嘆、「代ぞ」なら深く強力な語勢が響きが生まれることは確かである。この「よや」が「代ぞ」に変わることで言葉に重みが生まれる点を中国語に翻訳に反映させるのは難しい。しかし、この句が大谷氏ののように草庵への餞別として読んだという視点は、この句が芭蕉の旅立ちのどの時点で詠んだかという冒頭部最大の問題と関わってくる。

表八句を掛けたのが芭蕉庵か、それとも採茶庵か、また吟詠は出庵の前（雛祭る家の情景は想像ということになる）か、出庵後（雛祭の情景を眼前に囑目した）かという点で説

が別れる。『解釈と鑑賞』250号の「奥の細道の正しい理解のために」にこの句がどう解釈されてきたかをまとめている。^(注12)

- 1・雛商人が家を借りて、売物を置く所としたので此の句を作ったとする説。
- 2・芭蕉の出発により人の住みかわるのを、雛が古い箱を出て、雛段に移るのにたとえた。
- 3・年年雛が箱より出入するを生涯の定めなきにたとえた。
- 4・今まで僧とも俗ともつかぬ世捨人の住んでいた草庵にも、新来の住人が雛を飾って春らしくなった、
- 5・新来の住人は自分の如き世捨人ではないので、華やかな雛を飾られることだろう。

このうち1・2・3は真蹟短冊には「むすめ持ちたる人に草庵をゆづりて」とあり『世の中百韻』には「はるけきたびければ、日比住ける庵を相しれる人にゆづりていでぬ。このひとなむ、つまをぐし、むすめ・まごなどもてるひとなりければ」などの文から現在はまったく取られていない。^(注13) ①張訳が「人形が箱から壇上に移されるように、この草庵までも引越してくる人がある。この世の中の風俗。」という箱説をとっているのは張氏が留学し学んだ時機が影響しているであろう。「こんな隠者の住むような閑静な草庵さえも、住み替る世間のならわしにもれることなく、他人と住みかわることになったよ。三月の節句も近づいたが、丁度ひながその箱から移りかわって行くように」のように大藪虎亮氏や樋口功氏が箱説で解釈している。^(注14) 箱説は退けられ、現在は、蕉が杉風宅に移る際に、雛が新しい持ち主によって飾られるだろうという想像説と、杉風宅に2句も滞在したので、その間に芭蕉が元の家を見に行き、実際に雛が飾られている様子を見たという眼前説に分かれ解釈されている。中国訳はこの部分も非常に曖昧あるが、眼前説と想像説に分けると②陳岩訳は「草庵も住人が替わることになる。ちょうど人形を並べる三月である。わびしさが華やかさになる。」は想像説、③鄭民欽訳「草庵は既に主が替わった。雛祭りでは人形を並べ、喜びは家に満ちる。」は眼前説、④陳徳文訳「寂しい草庵は新しい主に変わり、桃の花の三月に、人形を並べる。」眼前説、⑤鄭茂清「草庵は相変わらずのである。やがて（他人に）譲る時節が来る。雛人形の家。」は想像説といえよう。文法から言えば「杉風が別所に移るに」は「移る時に」としか解釈できず、想像説しかとれない。しかし宇和川匠助氏が「本文に即する限りこの句は出庵直前に読まれたもので雛祭りは想像と解すべきだが、本分を離れれば雛祭を眼前にして詠んだという解し方も捨てがたい。」とし、文法的に矛盾する点について「結局、余りにも荘重な序章の文章中に据えられたがために、句と文との渾融に隙間を生ぜしめたのだとする」とされた。そして眼前説として加藤楸邨氏の「草庵のこの家も、世のならひに洩れず人の住みかはる時は来るものだ。かうして旧庵を見ると子を持つ人であろう雛が飾られて自分の住んだ頃といともちがった感じがする

ことよといふ程の意」を紹介する。^(注15) またこの他にも井本農一氏の「わびしい草庵も自分の次の住人がもう代わり住んで、時も雛祭のころ、さすがに自分のような世捨人とは異なり、雛を飾った家になっていることよ」（井本農一・久富哲雄）を紹介している。これに対して、想像説を唱える例として原退蔵氏『俳句評釈』の「自分が住みふるしたわびしいこの草庵ですら、やはり住みかはるべき時は来るものだ。しかも今度の新しいあるじは、自分のやうな世捨人ではない。妻もあり娘もあるのだから。折から雛祭のころでもあるし、今までのわびしさとは引換へてはなやかな雛人形なども飾られるだろう」をあげ、同じく想像説として三浦圭三氏、暉峻康隆氏、森修氏、志田義秀氏とグループ分けをして紹介されている。^(注16) この他、紹介された以外の想像説として『芭蕉入門』にも「この草庵ですら、やはり住みかはるべき時は来るものだ。しかも今度の新しいあるじは、自分のやうな世を捨てた人ではなく、妻もあり娘もあるので、折から雛祭のころとて、今までのわびしさとは引換へてはなやかに雛人形なども飾られるだろうよ」がある。^(注17) 筆者としては残りの句も発見できないため俳諧の作法というよりは、『源氏物語』『真木柱』の如く大谷氏の草庵への餞別と解釈するが、紙面の都合上『源氏物語』の『奥の細道』への影響という観点は次号で指摘する。

【注】

- (注1) 張香山「病倒旅途仍夢繞枯野」『读书』1989年Z1期, 1989年5月, 199-124
- (注2) 張香山訳『奥州小道』は最初『日本文学』季刊1987年第二期に発表されたが、入手が困難であるため、本論文では叶渭渠編『日本随筆經典』(上海文芸出版社, 2006年7月)に収録されたものを参考にした。
- (注3) 本論文は陳岩訳『奥州小路』(译林出版社, 2011年2月)を参考にした。
- (注4) 『奥州小道』松尾芭蕉著、鄭民欽訳、河北教育出版社, 2002年6月。
- (注5) 『松尾芭蕉散文』(松尾芭蕉著、陳徳文訳、作家出版社, 2008年9月1日)の本文を参考にした。
- (注6) 『奥之細道』松尾芭蕉著、鄭茂清訳、聯経出版社, 2011年1月。
- (注7) 尾形仿氏『おくのほそ道評釈』平成13年5月 角川書店)。
- (注8) 松隈義勇氏「無常漂泊の詩心—『おくのほそ道』序章私見「草の戸も」の句について—」(『文芸論集』17・1981年3月)。
- (注9) (注7)の尾形仿氏著。
- (注10) 大谷徳蔵氏「日本古典文学大系45」『芭蕉句集』。
- (注11) 富山奏氏「芭蕉の発句「草の戸も住替る代ぞひなの家」考—『おくのほそ道』寸見(二)」(『近世文芸』1994年7月)
- (注12) 「奥の細道の正しい理解のために」『解釈と鑑賞』250号(中村俊定・宮本三郎・板坂元・山下一海・森川昭)。
- (注13) 萩野清氏「芭蕉論考」、岡田利兵衛氏「奥の細道で残された芭蕉の真蹟」(解釈と鑑賞250号)で箱説を否定している。
- (注14) 箱説をあげているのが、大藪虎亮氏『奥の細道新講』(昭和25年)や樋口功氏『奥の細道評釈』(昭和5)。

- (注 15) 宇和川匠助氏『『草の戸も』解釈諸説の批判と紀行文と句との関係について』(『連歌俳諧研究』15号・昭和32・12)(高知大学学術研究報告・・6 1958年3月30日)において眼前説と想像説に諸説を分け紹介している。このうち眼前説として井本農一氏『奥の細道新解』(芭蕉講座 二巻 三省堂)、加藤楸邨氏『芭蕉秀句』、木村架空氏『新釈奥の細道』、荻原井泉水氏『奥の細道評論』、その他新古典文学全集本(井本農一・久富哲雄)。
- (注 16) (注 15)の宇和川匠助氏が想像説としてあげているのが、原退蔵氏『俳句評釈』。三浦圭三氏『奥の細道新釈』。暉峻康隆氏『近世俳句』、森修氏『おくのほそ道』、志田義秀氏『奥の細道新釈』である。
- (注 17) 『芭蕉入門』(今栄蔵、大内初夫、桜井武次郎著 有斐閣新書 1979年)。

追記 本稿は2016年度札幌大学研究助成金の成果の一つである。